

特選
2020

全国公民科・社会科
教育研究会会長賞

第18回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

お金がすべてじゃない

東京都・東京都立国際高等学校 2年 山崎 帆希

「お金欲しい。」

こんな言葉を日常でよく聞く。私も実際に言うことが度々ある。なぜ人々はこんなにもお金を欲するのか。それは言うまでもなく、お金が便利だからであろう。何か食べたいと思ったとき、新しい服が欲しいと思ったとき、店のレジの前で商品と共にお金を渡してしまえば、自分の欲は満たされるのだ。では、お金があればあるほど、幸せになれるということなのだろうか？ お金の量は幸せ度に比例しているのか。私は自分の周りの人がそれに関してどのように考えているのかということに興味を持ち、アンケートをとった。「お金の量は幸せ度に比例しているか」という質問に対し、回答者合計 116 名のうち「はい」と回答した人が 53 名、「いいえ」と回答した人が 63 名だった。この結果から、お金の量が幸せ度に比例すると考えるかどうかは人によって違うということがわかった。次に、「お金で幸せを買うことはできるか」というアンケートをとった。回答者合計 118 名のうち「はい」と回答した人が 40 名、「いいえ」と回答した人が 78 名だった。加えてその理由についてもアンケートをとったところ、「お金を使わなくても幸せを感じることはできるから」、「お金がある人もない人も幸せになれるから」、「幸せの基準は人によって違うから」といった様々な回答があった。つまり、お金の価値がどれくらいなのかは人によって違うのである。

私は今までお金に対して少し汚い考えを持っていた。お金というと、ただモノを買うことができる便利なものである、と思っていた。しかし父の意見を聞いてから、考え方が変わった。

私の父は花屋の店主として働いている。週に 2 日は朝 5 時に家を出て花を仕入れに市場へ行き、商品の配達もしている。父にも、先述のアンケートに答えてもらった。「幸せはお金の量に比例する」「幸せはお金で買える」という回答だった。私はそれを聞いて少し悲しくなった。なぜなら、所持している

お金の量で幸せを判断しているように感じたからである。しかしそれは違った。父にとって、お金は父自身が努力して得た対価であり、お金を持つということは仕事上で多くのチャレンジや努力をしたという証しに感じられるようだ。だから、お金を得たということに幸せを感じるのではなく、努力をして得たものであるということに幸せを感じるという。そして父は、収入以上にお客様の喜びや笑顔に幸せを感じるという。まだ仕事というものを経験したことがない私にとって仕事とは、金銭の受け渡し、つまり経済の動きが生じることで成り立つものだと思っていた。ところが、父のように考えている人も世の中には多くいるのである。要するに、仕事というものは、自分の働きかけと金銭の受け渡しによって成立していると考えられるのではなく、自分の働きかけと顧客の信頼や評価・笑顔の受け渡しであると考えられるということだ。そんな考え方をしている父は、収入で仕事を選ぶのは面白くないと言っていた。私にはその意味がわかった。もしも収入を目的に仕事を選び、お客様からの評価や笑顔を感じられなかった時、やりがいや仕事を続ける意味を感じられなくなるからであろう。これも人によって考え方が変わってしまうかもしれないが、いくら収入が少なくとも、お客様からの評価や喜びの言葉・励ましの言葉をもたらせる仕事の方が絶対的にやりがいがあると私は思う。仕事は経済がすべてではない。お金に左右される人生はつまらない。そう思う。

ここで、実際のデータを見ていこうと思う。はじめに、お金と幸福度の比例について、アメリカと日本のデータを比較する。まず、2019年5月に内閣府が発表した『「満足度・生活の質に関する調査」に関する第1次報告書』によると、世帯年収の幸福度は次の通りだ。①「500万～700万円未満」5.91点、②「2,000万～3,000万円未満」6.84点、③「1億円以上」6.03点。①と②からは多少②の幸福度の方が高いということがわかる。しかし、②と③の結果から、日本の場合はお金による幸福度には限りがあるということがわかる。次に、アメリカのデータを見ていく。2015年にノーベル経済学賞を受賞したプリンストン大学のAngus Deaton（アンガス・ディートン）教授らは2008年から2009年にかけて、アメリカ国民を対象に年収と幸福度に関する調査を行った。その調査によると、年収7.5万米ドル（1米ドル＝106円換算で約800万円）までは収入が増えるにつれて幸福度も上がる傾向にある。しかしその相関性は年収7.5万米ドルを

境に伸びがゆるやかになっている。つまり年収 7.5 万米ドルでも年収 10 万米ドルでも、幸福度に大きく影響はしていないと見ることができるだろう¹⁾。

そして次に見ていくのは、幸せはお金で買えるのか、ということだ。2018 年 1 月、学術誌「Nature Human Behavior」で発表された Andrew Jebb（アンドリュー・ジェブ）氏らの研究は、個人でどの程度の年収があれば、生活満足度や感情的安定からくる「幸福感」を得られるのかという内容のものだ（幸福感の定義は、一般的にお金が少なすぎると衣食住が満たされていたとしても生活満足度が低くなり、「幸福度」が下がってしまうという前提に基づいている）。この研究からは、幸福は所得と比例しないことが明らかになった。その上、興味深いことに、所得が増え続けたとしても幸福度は頭打ちになってしまい、その後はむしろ下がってしまうことがある。つまり、お金と幸せ度の比例について研究されたものと同じ結果で、お金で買える幸福には、「飽和値」が存在するのだ²⁾。

また、この研究は、世論調査などを手掛けるギャラップが 2005 年から 16 年まで、164 カ国で 170 万人の「個人収入と幸せ」について調査したデータを使い、所得のもたらす 3 種類の幸福の飽和値を測定した。1 つ目は、楽しみ、笑顔、笑いなどポジティブな感情をもたらしてくれる所得のことだ。日本を含む東アジアでは 6 万ドル（約 636 万円）が飽和値であることがわかった（本稿では 1 USD = 106 円で換算）。2 つ目は、ストレス、怒り、不安など、ネガティブな感情がわかなくなる所得のことだ。東アジアでは 5 万ドル（約 530 万円）で頭打ちになった。しかし、所得がこの額を超えても、ネガティブな感情は保たれてしまった。この 2 つの幸福を合わせて考えると、年収 530 ~ 636 万円で感情的安定が得られることを意味しているという。3 つ目は、人生における全体的な満足度を反映させた年収だ。この幸福では東アジアでの飽和値が 11 万ドルとなっており、感情的安定をもたらす額と比べると、はるかに高い水準である³⁾。

アンケートや父の話、実際の研究データから私が感じたことや気づいたことは 2 つある。1 つ目は、お金の量で幸せを感じるかどうかは本当に人によって基準が違っていて、価値観をそれぞれ持っているということだ。「お金がなくても幸せは感じられるし、お金と幸せは関係ない」という人もいれば、「お金の存在が自分の成果や努力の証しであるために自分の心をポジティブにしてくれる」と感じる人もいる。2 つ目は、人々は日々欲で満たされていて、もちろんお金

もその対象であるはずなのに、幸せの基準にお金を考えていない人の方が多いということだ。私が考察した2つのことをまとめてみると、「お金の量で幸せが決まるわけではない」ということである。私の知人でよく「お金さえあれば」という発言をする人がいるのだが、それはその人個人の勘違いであり、「お金というもの（札や小銭など）」が幸せを感じさせてくれる要因ではないのだ。もしそんなにもお金の存在に幸せを感じるのであればそれは、私の父のように「お金の存在が持つ意味」が要因なのである。

私はこれからの人生でお金に左右されるような人間にはなりたくない。仕事に就くときには、収入がどれくらいなのかといったもので就職先を決めるのではなく、本当に自分がやりたいと思えるものを選びたい。結婚相手は、年収が高い人を基準に選びたくない。自分が心から結婚したいと思える人がいい。たとえ将来お金に困ったときでも、「これでは不幸になってしまう」だなんて思いたくはない。

お金というのは、私たちの生活の中心であり、経済を回している大切なものである。何か社会現象が起きたときには経済に大きな影響を及ぼすこともある。しかし、自分たちの心や考えまでも影響を及ぼされる必要はない。私はこの論文を書くにあたってアンケートを行い、幸せの基準をお金に合わせている人が多々いるということに気づいた。私はそんな人々に伝えたい。幸せになるために一番必要なものはお金ではないということ。この科目の論文でそのようなことを書くのはあまり良くないのかもしれない、と自分でも思う。けれども、私が論文を書いたことで一番伝えたいと思ったのは、そのことであった。

(注)

1) au じぶん銀行「お金と幸福は比例する？」

URL <https://www.jibunbank.co.jp/column/article/00209/>

2) 3) WIRED「『幸せ』はお金で買えるが“限度額”があり、先進国ほど相場も高かった:米研究結果」

URL <https://wired.jp/2018/02/27/happiness-income-satiation/>

<参考文献>

朝日新聞デジタル 基礎から学ぶ、マネー&ライフSTART!「お金を呼ぶ教養塾 幸せはお金で買えるのか？」

URL <https://www.asahi.com/ads/start/articles/00030/>